

## 【論 文】

# Max Frischの „Montauk“ について

村 上 文 彦

## 要 旨

スイスを代表する作家Max Frischはその著書 „Montauk“ の中で交流のあった人達を描き出した。とりわけ女性たちとの関わりは多彩であった。彼はこの作品を「正直な本」であると前置きしているが、疑義を唱える声もあり、自伝か物語かその判断は分かれる。また彼は大胆な自己暴露と同時にいくつかの事実は伏せている。生前彼が設定した資料非公開の時期も過ぎ、新たな事実も明らかになってきたが、どのような人たちが彼の人生を彩ったのであろうか。

## はじめに

1991年にMax Frisch (1911-1991) がそのほぼ80歳の生涯を終え、それから今日までさらに23年の年月が経過し、時は足早に流れていった。スイスで最も高名であったこの作家Max Frischを偲んでチューリヒ市は1998年にMax-Frisch-Preisという賞を設けた。この賞は、芸術的に妥協しない形で民主的社会的根本問題を扱ってすぐれた作品を執筆した作家に与えられるもので、4年ごとに受賞者が決められ、これまで5人の受賞者を出し、それぞれ50,000フランという高額賞金が授与されていることからMax Frischの大きさとチューリヒ市の力の入れ具合が窺えるのである。<sup>1</sup>

このような賞が設けられ、複数の受賞者を出し、さらにその中で2002年第2回受賞者のJörg Steinerが既に他界してしまったことを思えば、Max Frischは遠い過去の人になってしまった印象も受けるが、彼に関わった様々な人たちがいまだ多数健在で、Frischの思い出を胸に生きているのである。Frischは63歳の時に „Montauk“ という作品の中でそれまでの自分の過去をふり返り、とりわけ心に残った懐かしい人々を描いている。彼はどのような人たちと交流を交わし、どのような人生をたどったのか、そしてどのように作品に反映させたのかを辿ってみたい。

## 1. „Montauk“ の成立

„Montauk“ とは当時63歳のMax Frischが1974年から75年にかけて執筆した散文作品である。大部分は1974年夏、版画家にして画家でもあり彫刻家でもある友人Gottfried Honegger (1917年-) のチューリヒ郊外、チューリヒ動物園の近くにあるゴックハウゼン地区にあるアトリエで執筆した。この作品を執筆する動機はアメリカ旅行にあった。

そもそもFrischは1951年、40歳の時にアメリカのロックフェラー財団から奨学金を給付され約1年1か月アメリカに滞在したが、その時ニューヨークを初めとして様々な都市を訪問し、メキシコまでも足を伸ばし、アメリカから様々な刺激を受けた。そしてアメリカに好印象を持った彼は、それ以後何度かのアメリカ滞在を行っている。そして1974年4月、63歳になる直前のFrischは、アメリカ芸術文学アカデミー (Academy of Arts and Letters) と国立芸術文学研究所 (National Institute of Arts and Letters) の名誉会員を授与されるためアメリカに旅行した。この機会にアメリカの女性出版者Helen Wolff (1910-1994) がFrischのために約1か月間の朗読ツアーを企画した。Frischはその申し出を受けたのである。<sup>2</sup>このWolffはマケドニア生まれで、父親がドイツ人、母親がオーストリア-ハンガリーの出身で、Franz Kafkaの本を初めて出版したKurt Wolff (1887-1963) の妻であり、夫と共に1942年アメリカに移住した。しかし夫のKurtが1963年西ドイツで交通事故によって亡くなってしまったため、その後出版業を継ぎ、特にドイツの文学をアメリカに紹介することに力を注いでいた。その功績により、1981年には西ドイツ政府から文学と芸術の国際賞を受賞し、1985年にはニューヨークのドイツ文化協会からゲーテ・メダルを授与されている。このWolff女史からの招へいを受け、彼は4月にアメリカ朗読旅行に単身で赴いた。

Frischはこの時2番目の妻Marianneと結婚していたが、Marianneがアメリカ人作家Donald Barthelme (1931-1989) とただならぬ仲となったことにより、Frischとの間が破たんをきたし別居中であったこともあり、単身で渡米した。WolffはFrischの付添人として社員のAlice Locke-Careyを随行させ、身の回りの世話を焼かせたのである。<sup>3</sup>

Aliceは彼の作品をまだ一冊も読んだことのない1943年生まれ31歳の女性であったが、Frischに随行する業務命令が下ったのである。この時Aliceの所得は月1,080ドルで税金を差し引くと手取り750ドル。年間2週間の休暇付きだが、Aliceの勤務状況に会社が満足しない場合は週単位で解雇通告をすることができるということになっていた。<sup>4</sup>つまりAliceはFrischに不満を抱かれないように彼の身辺世話をする義務が課せられたのである。そして約1ヶ月の朗読旅行の間AliceはFrischに同行し、FrischはAliceに不満を抱くことはなく、むしろ二人は親密になるのである。

Frischに依頼されたのは講演ではなく、朗読つまり、„Lesetour“ で、Frischは次のように記している。

「私は私の役割を演じる。主催者が手配してくれる飛行機とホテルの中でだけ、私はしばし一人になる、そして何も考える必要はない、シャワーを浴びるか風呂に入り、それから窓辺にたたずみ違った町を眺める。何時も少し上がってしまうのだ。朗読するとき、読

んでいる一語一語を忘れていく。その後立食の冷たい食事、いつも同じ質問をされるが同じ答えををするとは限らない。私は自分の答えがそれほど説得力があるとは思わない。ある女性が話しているとき私は間近にある彼女の上品な歯に目をやり、グラスを手に持ち、汗をかいているのだ。これは私のやる仕事ではないと思いながら私はそこに立っている—」<sup>5</sup>

そして例えば、エール大学のアメリカ人女子学生は、「StillerはいったいJulikaが救済されることを本当に望んでいるのですか、あるいは彼にとっては、彼女の救済者であることが何よりも大事なのですか」と質問してくるのである。<sup>6</sup>

これがHelen Wolffが企画した朗読旅行の一端で、同行する娘のようなAliceはまさにFrischの長女Ursula (1943-)と同令であった。そして朗読旅行も終わりヨーロッパへ帰国する直前の5月11日(土曜日)と12日(日曜日)の二日間、彼はAliceとマンハッタンから110マイル離れた、ニューヨーク州にあるロング・アイランド島の東端のモントーク岬で週末を過ごすのである。翌週の5月14日(火曜日)にはFrischのヨーロッパへの帰国便が予約しており、さらにその翌日15日はFrischの63歳の誕生日であった。そのモントーク岬で過ごした時のことを中心に記述したのが„Montauk“という作品である。

この物語はまず„OVERLOOK“(見晴台)と書かれた表示板がこの島の展望を約束しているという文章で始まっている。二人は大西洋を見渡す展望台へと行くが、それはFrischのこれまでの人生を展望する場でもあった。広々とした大海原を見る彼には、かつて海を見たギリシャ旅行や、北海に面したジュルト島の海岸が蘇ってくる。彼の心にはこれまでの人生の様々な場面や、いろいろな人々が走馬灯のように巡ってくるのである。

Montaukに同行したAliceはLynnという名前で描かれているが、「水の中の明るい結晶のような青い眼をした」彼女はフロリダの生まれで、カリフォルニアのカレッジに通い、シドニーで結婚したが長くは続かなかった、ということ以外その素性はそれほど明らかにされない。<sup>7</sup>

「Lynnは負い目を抱くような名前にはならない」<sup>8</sup>と記されているが、二人はドライブし、食事をし、ピンポンをし、おしゃべりをし、一緒に眠るのである。朗読旅行をやり終えた解放感と、Frischが帰国するまでの自由な時間、拘束するものはなく、リラックスし、そしてFrischは砂浜の椅子に腰かけ、両足を砂に、両手を首の後ろで組み合わせ、心は過去へとさ迷い歩くのである。Lynnは彼に過去をふり返らせ、Frischの中に過去への省察と胸の奥に秘めていた追憶を呼び起こさせるのである。60歳をすでに過ぎ、自分の死を見つめなければならない老境に入ったと考える彼がそこでLynnと過ごすその週末の描写の間に、過去の出来事や思い出が様々な形で挿入され、この物語が構成されている。Frischが同行者Lynnを好意的に観察している一方で、Lynnと過ごす現在の場面と、これまでに関わった女性たちや、思い出した過去の人生の状況、引用文や、場所の表示や、そのまま英語で書かれたLynnのインタビュー的な質問などを様々な個所に、いろいろな形で配置することで物語は構成されている。例えばそのLynnの発する質問は、「この国に以前来たことがあるの」、「結婚しているの、ヨーロッパのどこに住んでいるの、子供さんはいるの」、「次は何を書くの、お芝居、それとも小説、それとも別な日記なの」<sup>9</sup>「マックス、あなた

はお母さんが好きだったの」<sup>10</sup>などといった極めて素直な質問の数々である。

つまりFrischは、彼独特の „Tagebuch“ スタイルをさらに発展させた形式でこの作品を描いている。挿入されている追憶の数々は彼自身が関わったということ以外、それぞれの思い出に因果関係はないことが多い。また挿入されているものは単語1個、文章1行からあり、最も長いのは、少年時代の友人でFrischの父が急逝した後に学費を援助してくれた裕福なチューリヒの出版業一家Coninx家の子孫で、„W.“ で表現されている。これは若いころの友人であり支援者である Werner Coninxのことである。<sup>11</sup> そして、この作品でとりわけ描かれているのは女性たちであり、Aliceをはじめとして、彼の最初の結婚時代と彼が初めて異性を意識した淡い初恋の相手で、今では身体が不自由となってしまう隣人の女性、さらに描き出されているのは市民階級知識人一家の出で、ドイツ系ユダヤ人の大学の友人Käte Rubensohn (1914–1998) との最初の恋愛の話、建築学を学ぶ学生そして若き建築士としての体験、富裕な市民であるGertrud (愛称: Trudy) Anna Constanze von Meyenburg (1916–2009) との最初の結婚、初めての子供、離婚、果たさなかった父親としての役割などである。さらに女性作家Ingeborg Bachmann (1926–1973) とのパリでの最初の出会いや難しかった関わりについて述べており、Bachmannの性的な面での自由さとFrischの辛い激情的な嫉妬を描いている。そしてまた2番目の妻 Marianne Oellers (1939–) についても述べられている。若い女子学生であったMarianne とのローマでの最初の出会いや、スイスへの2人しての転居や、寒村ベルツォーナの住居の購入と改築、たくさんの旅行、Marianneの不倫行為などが描かれているのである。そのほかに彼の性的不能、そして3人の女性との間の4度の墮胎など、自分の歩んできた人生からごく個人的な詳細なことまでを漏らしている。それは一貫して自伝的追憶であり、自分自身のことや、貧しい子供時代のことや、彼が関わりを持った人たちのことなどが、ある時は生々しく、またある時はしんみりと、そしてたびたび挿入されているLynnのインタビュー的な英語の質問などが、まさに文字で描かれたコラージュのように、独特で特殊な効果を生み出すべく作中に様々な形で張り付けられ、配置されているのである。

しかしこの作品は一つのストーリーが展開され、秩序だって描かれている作品ではなく、現在の出来事と過去の出来事が複雑に絡み合わされて描かれており、Frischの人生についての予備知識がなければ、誰のことを指しているのか、あるいは何のことを語っているのか不明であったり、理解できなかつたりする場合もあるのである。例えば単なる場所の表示であったり、DEJA VU:<sup>12</sup>や、DAMN!<sup>13</sup>や、SHIT!<sup>14</sup>とだけ書かれていても何を意味した単語なのかなかなかわからない。最も難解だと思われるのは・・・<sup>15</sup> 3点リーダー、つまりプンクト3個だけの表示である。

また女性についての記述でも、どの女性について今語られているのか必ずしもはっきりしない場合もある。そのスタイルは突然であり、一読で正確に読み取るのは簡単ではない。詳細はしばしばほのめかされるだけであり、その結果簡単には理解しがたい作品となっているのである。そして読者の眼差しをLynnと過ごすその中心的事柄よりもむしろその周囲に挿入された出来事へと向けさせるのである。

強制されることなく呼びさまされた追憶は作中にちりばめられており、彼は自分の年齢

を思うのであり、他の人への彼の強まる感情や、彼の成功とそれを妬む人や、賛美する人や女性たちのことを思うのである。FrischとLynnはこの時点では恋愛関係でも、パートナー関係でもないが、FrischはLynnを好意的に観察している。同時に妻のMarianneもたびたび思い出されるのである。

同行するLynnは、若く、足取り軽く、脚が長く、ウエストがほっそりし、赤毛で、賢く、素直で、色白である。赤いポニーテールで、あるいはピンポンゲームで、彼女は „Homo faber“ のSabethを思い出させるのである。LynnはFrischに将来を求めることもなく、二人で過ごしている現在のひと時に没頭し、打算も欲もなく、陽気でFrischに好感を抱かせるのである。引用されている彼女が発する言葉や質問は、直接的で、悪意がなく、Frischの耳に心地よく響くのである。

Lynnと並んでとりわけFrischのかつての伴侶やパートナーたちが物語の中心にいる。„Homo faber“ のHannaのモデルであるとされるユダヤ人女性Käte, Stillerの妻Julikaのモデルとみられる最初の妻Trudy, 隷属と嫉妬で刻印されたIngeborg Bachmannへの関わり、彼と別居しているが、彼が今でも愛しているMarianneなど、かつての女性たちへの追憶をLynnは呼び起こさせるのである。もはや遠くはない自分の死を前にしてFrischは彼の将来性のない未来とこのLynnという女性を結びつけようとは思わない。と同時に彼は、Lynnが彼の人生の最後の女性であることを願うのである。しかし二人には、彼らの関わりがこの週末に限定されたものであろうことと、彼らが二度とふたたび親しい関係になることはないだろうということをはっきりしているのである。Frischは、Lynnがそれまでの女性たちとは違って、罪を感じる名前にはならないだろうと望んでいる。

そしてMontaukからニューヨークに戻り、物語の最後でLynnとFrischは „Bye“ と言って別れるのである。そこはマンハッタンの国連ビルのすぐそばで、1番街と46丁目の交差点から立ち去っていくLynnをFrischは見送るが、彼女は彼のほうを振り返りはしなかった。それまでに至る2日間の小旅行とその旅行の間Frischの脳裏によみがえった思いの数々、そして彼の心模様を記したのが „Montauk“ という作品なのである。

## 2. 真実と虚構の狭間

Frischは作品の冒頭、「これは正直な本だ、読者よ、私がこの中で、家庭のことと個人的なこととは別な結末をもくろんだりしていないということは、読み始める際にもう君に警告している... 私は私が描き出すそのものなのだ。私の過ちがあるがままにここで見つかるだろう、そして公の礼儀が許す限りにおいてだが、私の本来の人柄...そこでは私自身が、読者よ、私の本の唯一の内容である...」<sup>16</sup>と断っている。最初にあげられているこのモットーはモンテーニュの「エッセー」の序文を引用したものだが、Frischが自分自身を創作の材料にしているということは格別目新しいことではなく、いろいろな作品に彼自身が投影されている。そしてその作品の冒頭でFrischは、この物語は正直な自伝的作品であると宣言している。Frischは「この週末を、出来事を作り出したりせず、フィクションの人物や

出来事を作り出したりせず、自伝的に、そう、自伝的に物語る決心をした」のである。<sup>17</sup>

この前置きは、これまでの作品とは逆の構想でFrischはこの週末を、直接的な経験をドキュメント的に記述する決心を述べているのである。Frischの「正直な」とはどのような意味なのかといえ、おそらく、嘘のない、虚構の含まれていない作品という意味であろうと思われるが、描かれていることのほとんどは確かに彼の過去事実に符合している。その限りにおいては正直なというのは間違いなく、彼の人生と物語で述べられたことの一致は疑いもないのである。したがってFrischの人生に関して予備知識がなければ理解が難しい場面もかなり存在しているのである。そして彼のこの作品に対する基本姿勢は、例えばやはり彼の散文作品である „Mein Name sei Gantenbein“ とは対照的である。描かれたできごとが明らかにフィクションであることを感じさせるこの „Mein Name sei Gantenbein“ という作品は、思い浮かべられた物語であり、事実を即した自伝とは異なる。Jürgen H. Petersen は次のように述べている。

「„Montauk“ は „Mein Name sei Gantenbein“ への反証のように作用するのである。ここではすべてのできごとがフィクションとして意識させられるのに、Frischは彼のこれまでで最後の叙事詩的な仕事では最初からこの物語の信ぴょう性を強調している」<sup>18</sup>

Frischはまたこの作品に „Mein Name sei Gantenbein“ から「私は洋服のように物語を試してみる」 „ICH PROBIERE GESCHICHTEN AN WIE KLEIDER“<sup>19</sup> という文章をも転用して挿入しているが、この文章は、読者を混乱に陥れる。なぜなら挿入されているのはこの一文だけで、前後の記述とは全く関わりなく入れられているのであり、唐突の感が否めないのである。Frischは „Montauk“ という物語を正直な本と規定しながらも、まさにこの場で対照的に純粋にフィクションである „Gantenbein“ という小説の基本理念を持ち出しているからである。„Montauk“ と „Mein Name sei Gantenbein“ では創作の根本思想が異なっているはずなのである。ここでFrischが「試してみる」物語は、 „Mein Name sei Gantenbein“ におけるのとは違って、本質的に虚構を意図しているのではないが、しかしまた完全に自伝的でもない。

「これは正直な本である」と冒頭に断っておくことも創作技術の一つであり、作品全体の効果を考慮して書かれたとしても、それが正確に事実通りの作品とは限らない。たしかに、事実にかぶさることの多い作品であるが、作家の序言を鵜呑みにするのは問題がある。ここは慎重に、冷静に熟慮する必要が求められるのである。そもそもすべてが事実であるならば、同行の女性Careyの名前をLynnという名前に変えるはずもなく、名前を変えた時点でこの作品は事実の要素を多く含んでいる作品ではあるが、すべてが真実であるということからは離れることになるのである。したがってここで見落としてならないのは „Eine Erzählung“ と付されているサブ・タイトルである。つまり、Frischは『一つの物語』を文字通り物語っているのである。

そして何が事実であるかが皆目わからない読者は、つまり彼の自伝的背景を知らない者は、「これは正直な本である」という冒頭の文を信じて „Montauk“ を非フィクション文学として読む可能性は高いであろう。そしてとりわけこの作品で問題とされるのが、描き出

された女性たちとの関わりである。これらの女性たちは実名を挙げられ、そこに描かれた事柄は史実に即しているのである。

Frischは „Stiller“ (1954) や, „Homo faber“ (1957) や, „Mein Name sei Gantenbein“ (1964) などの散文作品を執筆したが、とりわけ „Mein Name sei Gantenbein“ の中で、物語る過程での虚構性を意図的に極端なまでに推し進め、そしてあらゆる事柄をフィクションの中で開放していたのである。その行き着くところ、つまり „Montauk“ は終点であり、フィクションと真実の関係で言えば反対極である。すべては真実であるかのように扱われ、虚構も真実性のペールをかけて扱われているのである。そしてそれらは「芸術的圧迫感の下で」物語られるのである。<sup>20</sup>この芸術的圧迫感とは、創作能力の衰えを感じている中での作家として「書かなければ」という気持ちと「書きたい」という気持ちの混合であろう。そして物語の材料はFrisch流に変形され、加工され、配置され、濃密にされているのである。同時に、この作品で第一義的に扱われているLynnと過ごす現在は穏やかな時の流れのように経過していくが、LynnとFrischの間には越えがたい距離があるのである。それはFrischにとっては死を見つめなければならなくなった老齢化、緩やかな恐怖を意味するあらゆる面での退化、人間として、作家として、男としての衰え、避けられない人生の現実であり、そしてLynnの言葉がすべて英語で書かれているように、Frischがネガティブに表現する自分の英語力と言葉の壁が二人を隔離しているのである。さらに帰国直前の週末という限定された時間が、彼らを妨げている。それゆえに二人は一定の距離以上親密にならないだろうというFrischの予測が「Lynnは彼のヒステリーを知ることはないだろう」<sup>21</sup>と記すのであり、「このうら若い女性を私の将来のない人生に結び付けようと思うのは許されないことだと知っている」<sup>22</sup>とも記しているのである。

### 3. 越えねばならぬハードル

Frischは „Montauk“ という作品を完成させたが、それを刊行するには妻のMarianneの了解を得るという越えなければならないハードルがあった。1962年、FrischはBachmannとの隷属的な関係に終止符を打ち、同居を解消する。翌1963年初めにローマの喫茶店でBachmannと最終的に別れたが、それでFrischのローマでの生活が終わったわけではなかった。その時51歳であったFrischはドイツ文学とロマンス文学を学ぶ23歳の大学生Marianne Oellersと知り合っていたのである。因みにFrischはこの年Uwe Johnsonとも知り合っている。

Marianneはデュッセルドルフ出身のドイツ人女性で、1939年生まれでFrischよりも28歳若かった。その最初の出会いはFrischとBachmannのところで催された食前酒の会であった。Bachmannと別れた後、FrischとMarianneは一緒に生活することになるのである。1963年彼女はローマのマルグッタ通り53番Bの住まいに入居し、彼らは1965年5月までそこで生活し、その後彼らはスイスへ戻ったのである。

イタリア語が堪能なBachmannとは違って、二人はほとんどイタリア語を話さなかった。

1964年5月Frischはロカルノの高台にあるテッシン州のベルツォーナに山荘を手に入れた。1965年、二人はFrischの設計で修復された山荘に入居した。Frischは当初この山荘を夏の別荘と考えていたが、ここに滞在する時間が多くなり、チューリヒとベルツォーナに交互に住みだした。Frischはチューリヒに借家があったが、1968年チューリヒ湖の東岸に面したキュスナハトのビルケン通り8番地に住居を買い求め、また1973年にはさらにベルリンにも居を構え、二人は離婚する1979年までしばしば滞在した。

知り合って5年後の1968年12月、二人は正式にベルツォーナで結婚し、その後の数年間たびたび旅行をし、多くの作家たちと交流を持った。1970年5月、FrischはMarianneとPeter Suhrkampの後継者Siegfried Unseldと共に、当時ニクソン・アメリカ大統領の補佐官であり、いわば時の人であったヘンリー・キッシンジャー氏をワシントンのホワイトハウスに訪問した。それ以外は主としてベルリンとベルツォーナを行き来する二人の結婚生活だったが、1971年2月ニューヨークに住まいを借り受け、ほぼ半年間滞在したのである。この滞在中、Marianneがアメリカ人作家Donald Barthelme<sup>23</sup>と恋愛沙汰を引き起こしてしまうのである。このことがFrischの逆鱗に触れ、二人は1973年から別居状態になるのである。そして上述のように、1974年Frischが渡米することになった時、Marianneをベルリンに残し、彼は一人で旅立った。

Marianneは前々からFrischと二人だけのプライベートな部分を大切にしようとし、他から干渉されるのを嫌っていた。カメラマンに写真を撮られるのをとりわけ嫌悪した。<sup>24</sup> Frischは名誉欲が人一倍強かっただけではなく、作家という職業は社会との関わりが大事で、写真を撮られるのもその一つと考えていたので自分が写されるのは拒否しなかったが、カメラマンが彼女にレンズを向けようとしたときは彼がそれを防いだのである。そして、MarianneはFrischが身近な事柄を創作の材料にすることを嫌い、しばしばそのことで彼らは話し合っていたのである。Frischも自説を曲げなかったが、Marianneも負けてはいなかった。妻を説得できず、彼が言葉を発するとすぐに口をはさむのに業を煮やし、台所に行ってごみバケツを持ってきて頭の上に置き、「さあそれから何だって、さあどうぞ。」と腹を立てたり、冬の凍てつくような2月の雨の夜にパジャマのまま裸足で家を飛び出しずぶぬれになって家の周りを歩き回り、寒さががたがた震えたこともあったのである。<sup>25</sup>

これらのことから二人の間にいかに激しいやり取りがあったかが推測されるのである。互いに譲らない、そして何度も交わされたであろう夫婦の会話の中で、おそらく感情的に激した時に発せられたと思われるMarianneの言葉はFrischにとって強烈であった。彼女は次のように言ったのである。

「私は創作の材料としてあなたと生活を共にしてきたものではありません。私のことを書くのは禁止します。」<sup>26</sup>

しかし驚くべきことに、Frischは妻の禁止を破ったばかりではなく、その言葉までも「Montauk」の中に用いたのである。そして彼はそれゆえになおその作品を公けにするには妻の了解を得る必要があった。

1972年にFrischは当時まだ西ベルリンであったFriedenau地区のSarrazin通り8番地にマンションを購入していたが、そこに40余年を経た今もなおMarianneは健在であった。



最も行動的な文芸批評家Volker Weidermannは、2010年5月、その家に直接Marianneを訪ねてインタビューを試みている。すでに71歳となっていた彼女は当時のことを、つまりローマや、ベルツォーナや、チューリヒや、ニューヨークでのMaxとの生活や、彼が彼女に新しい原稿を読むようにと渡した1974年11月のある朝ことを彼に語ってくれたのである。その辺の事情はWeidermannが詳細に触れているので、ここに引用してみよう。<sup>27</sup>「.....これは私が書いたものだ。出版するかどうかは決めていない。だけど、まあまず読んでみなさい。私はしばらく外出してくるから」と彼（Frisch）は言って、家から出て行った。Marianne Frischはまだパジャマ姿のまま読み始めた。彼女は読み出し、ゆっくりと正確に読み続けた。夕方彼は戻ってきた。Marianneは原稿の前に座り、まだパジャマのまま、そして泣いていた。彼らはその後長い時間その原稿について話し合ったが、抗議に対して彼は敏感に反応した、そして彼女はすぐに感づいた。つまり、彼はもちろん出版を十分に考えている、と。彼は彼女の理解が必要なだけだった。だがショックはその時点ではあまりに大きすぎた。もちろん彼女は前もってすでにこのAlice嬢のことは聞いていたが、それはほんのささやかな、些事に過ぎなかったのだろう、何も重大なことではない、この瞬間の幸せな時に本一冊書くためであって、きっと深刻なことにはならない、と彼女は思っていた。そう彼は彼女に言っていたのだ。『恋愛には発展しない。絶対ない』と。

Marianneに渡された原稿の中に描かれていたのは赤裸々な女性たちとの関わりであり、Aliceを受け入れる夫の姿であった。妻であるMarianneがそれを読んで平然としているはずはなかった。そして二人の話し合いは平行線をたどり交わるところがなかった。Weidermannは「しかしMax Frischは抜け目がなかった」<sup>28</sup>と評しているが、まさにその通りFrischはMarianneを一つの結論に到達するように導いたのである。つまりFrischは出版することを洩るMarianneに、この原稿の文学的品質と人格権違反の間を慎重に比較考慮し、賢い判断を述べてくれる中立の、そして文学の素養が豊かな鑑定人を探すという考えを抱かせたのである。しかし彼ら夫婦が心置きなく信頼できる友人が多数いるわけではなかった。彼はもちろん、それに対して適任者はたった一人しかいないということを充分に知っていた。つまり、Frischが4月にニューヨークに単身で飛び立った時、Marianneは夫から見捨てられたような感覚でベルリンに残った。その時Frisch夫妻はUwe Johnsonと彼の妻Elisabethと極めて昵懇だったのである。不安と孤独感にさいなまされた時にはMarianneは、Johnson宅に宿泊したのである。限られた友人たちの中で、Johnson以上の適任者は思いつきようがなかった。それゆえに鑑定を依頼するのはJohnsonに決定したのである。しかし実はFrischはそうなるように事を運んでいたものであり、前もって手を打っていた。Johnsonは1974年秋ベルリンからイギリスのテムズ河口のシェピ島にあるシェアネスという港町に転居していたが、Frischは1975年1月3日から6日までシェアネスにJohnson夫妻を訪問し、主の公現の祝日である、東方の三博士来訪の記念日の1月6日にロンドンからニューヨークに飛んでいる。恐らくその時にJohnsonに事情を話し、Marianneからの問い合わせに準備してくれるよう依頼していたと思われる。そのあたりの事情はFrischとJohnsonの書簡集が明らかにしてくれているが、それを裏書きするのが1975年1月10日付のJohnsonからFrischに宛てた書簡である。その中でJohnsonは「彼女

(Marianne) も、あなたが前もって言ってらしたように、ロング・アイランド島のかなり小さな場所に関する手紙をくれるよう頼んできました」と書いているのである。もちろんロング・アイランド島のかなり小さな場所とはMontaukを指しているのである。そしてJohnsonは1月13日付でMarianneに „Montauk“ を読んだ鑑定書というべき書簡を送り、そのコピーをFrischにも送っているのである。それはMarianneから依頼した事柄である以上、Marianneはその判断を尊重しなければならない立場にあった。そしてそこで伝えられたJohnsonの判定はMarianneの全面的敗北を意味していた。Johnsonの判定の要点はおよそ次のようなものであった。

「...Frischさんは自分自身の人生から文学という方法で一つの芸術作品を作り出しました。配慮の無さを指摘する人がいるかもしれませんがそれは悪い読み方です。つまりモンテニユの序言を無視してしまうことになります。そこではモンテニユや他の誰かに対しても告白の権利を否認してしまうという誤った裁きがなされるということです。配慮の無さとは信頼の裏切を意味しています。ある作家と交際する人はいつの日にか自分がある物語に入れられているのを発見するということをどのみち予見しているものです。無思慮ということは別な言い方をすれば羞恥心の限界違反を意味しています。下品なことからダーティな週末に至るまですべてをさらけ出すということは無思慮です。これはモンテニユの継承者であるならば自制すべきでしょう。しかし作品の変更を求めるならばこの物語の構成は解体してしまい、この本は台無しになってしまうでしょう」といった内容のものであった。

依頼したJohnsonからの判定が下された以上、Marianneはこの原稿の出版に進んで賛同はしないものの、反対することはもはやできなかった。そしてここでハードルは超えられたのである。

もともとFrischはそのまま出版するつもりでいたであろうし、Marianneがとりわけ神経質になっていたのは自分の不倫が公になる点であったと思われるが、Johnsonの鑑定書はきわめて模範的であり、分別のある判断であり、細部にわたって忠実に、なぜそのように書かれなければならないか、そして作者にとって他の方法はあり得なかったことがこんこんと述べられていたので、作品の内容の変更などはもはや要求不可能であった。

Frischはこの鑑定に感謝しつつ、Johnsonに宛てて、私はこの本の出版を今や決心した、と書き送ったのである。Frischは、新しい本の出版か、妻の気持ちの尊重か、自分にとってより重要なことは何かを決心したのである。そしてこの本を絶対に刊行するという彼の気持ちはまさに強固なものになった。

1975年1月20日ニューヨーク滞在中のFrischはJohnsonに感謝の手紙を書いているが、その中で、「Donald Barthelmeが1971年10月9日付のNew Yorker誌に書いたものを昨日初めて見つけた」と書いている。そして „Montauk“ の原稿をさらに推敲し、強化して出版する決意を伝え、Marianneは離婚することだってできるんだ、とまで書いている。その結果、FrischはBarthelmeの書いた „Departures“ と題した記事の一部分をこれ見よがしに „Montauk“ の中に挿入したのである。<sup>29</sup>さらに1月22日付のJohnsonへの手紙の中で

彼はJohnsonの分析が傑出していることに再度感謝しつつ、万が一紛失した場合のために既に3通のコピーを取っていることを明らかにしていた。1通はJörg Steinerに、1通はAdolf Muschgに、1通はチューリヒ近郊のキュスナハトにある彼の書き物机の中にあった。<sup>30</sup>

FrischはBarthelmeとただならぬ関係になったMarianneに立腹しながらも、それでもなお彼女を愛していたのである。<sup>31</sup>その執着する心はLynnにも見抜かれ「あなたは彼女が好きなのね」と指摘されるのである。<sup>32</sup>

そしてMarianneにとってはBarthelmeの名前を出されることも不本意であったであろうが、何よりも決定的だったのは、これは正直な本だと何度も繰り返している一方で、数々の女性との関わりを明らかにしたばかりではなく、少なくとも法律上も妻であるMarianneに公然と不倫を明らかにし、さらに「Lynnが最後の女性であることを願う」と綴ってあることである。妻である自分が最後の女性であることを願っていないということの意味するこの文は、自分と別れ他の女性とパートナーになることを指している。それはFrischには自分がもはや不必要であることなのである。したがってこの本の出版に同意するということはFrischからの別離を受け入れることを意味するのである。それは12年前、Bachmannと一緒にいたFrischと彼女が知り合った時に類似していた。その時FrischはBachmannと別れてより若い彼女とパートナーになった。いま彼女からさらに若い女性に変えようとしているのだった。Frischは移ろいやすい心の持ち主で、一人の女性と終生生活を共にするタイプの男性ではなかった。したがって „Montauk“ という作品はMarianneにとっては離婚の予言書のようなものであり、簡単には同意できなかったのだ。しかしJohnsonの判断が出た以上出版に同意せざるを得なかった。Frischにとって障害は取り除かれたのである。結局この原稿は1975年9月20日にSuhrkamp出版社から刊行され、単行本となって店頭に並び、それから約4年後の1979年3月30日二人はテッシン州で正式に離婚することになるのである。

#### 4. 許される限界

Urs Bircherは「 „Montauk“ という物語に対する公の反応は圧倒的に肯定的であった。Marcel Reich-Ranickiは1975年10月7日のFrankfurter Allgemeine Zeitung紙上で『これは彼の最も個人的な、そして最も繊細な、最も控えめな、そしてそれにもかかわらず最も大胆な、最も質素な、そしておそらくまさにそれゆえに彼の最も独創的な本である...』と最大級に称賛している」と述べている。<sup>33</sup>

この賛辞の中の『最も独創的な』という点での評価は一致していると思われるが、意見が分かれるのは『最も大胆な』という点にあらう。Frischは自分の個人的な生活を思い切りよく、正直に白日の下に晒した。彼が彼自身だけのことを晒したのであればとりわけ問題にはならないかもしれない。しかし、そこに描かれた人たちの了解を得ることなく、その関わりを暴露したことは特定の人たちに大きな影響を与えたのである。Frischのかつて

のパートナーたちは、過去をむき出しに生々しく描写されることによって信用を落としてしまうことになったのである。

Frischは „Tagebuch 1966–1971“ の中で「他の人たちの秘密を漏らす権利を私はどこから手に入れるのか」と自問している。<sup>34</sup>『芸術的圧迫感の下で』<sup>35</sup>自分自身を物語ることは、Frischにとって作家としての使命ではあろう。その際どの時点でブレーキをかけるのかは彼の作家としてのセンスにかかっている。彼が名前を挙げた人々への気配りと文学的価値は反比例するものなのか。あまりにも露骨な個人生活の暴露に戸惑いや、不快感を覚えた読者も少なくないという。描き出された人々にはなおのことその思いが強かった。„Montauk“ は本当の自分を描いた本である、と前言で述べているがゆえに、その公表はたくさんの怒りをも生み出している。この作品の内容を事前に知っていたMarianneは激しい拒否反応を示し、彼女の同意を得るだけでもFrischがあの手この手の方法でやっと手に入れた経緯を考えれば、特に存命の人たちに対しての配慮は求められて当然のことであった。Marianneは1975年1月28日付のJohnsonに宛てた手紙の中で「なぜ友人は „W.“ で、女性は（その娘の名前はAliceというのです） „Lynn“ なのですか、それから『ある若い友人』とか、『あるユダヤ人の許嫁』などなどとされています。Ingeborg Bachmannや、Marianneや、Donald Barthelmeなどのように直接実名を原稿の中に持ち込むことによって急進性、正確性、真実性の点で効果を発揮しているのはわかりますが…」と不満と疑問を漏らしているが、これは恐らくFrischとも何度も話し合ったことと思われるが、もっともな疑問である。実名を挙げている人物と、イニシャルや、仮名を付されている人物との間にどのような違いがあるのであろうか。Frischはこの点に触れていないのである。Marianneの指摘する通り、実名を挙げればその真実性は大きく増すであろう。しかし、なぜ、あるいはどのような基準で、描いた人物たちを実名と、そうではない人物たちに分けたのかは不明のままである。そしてとりわけ実名を挙げられた人物たちとの関わりを描いた際にFrischは道徳的に許される範囲を逸脱して、女性の尊厳を踏みじり、女性のきわめて個人的な情報を暴露した。したがって、「秘密を洩らされた人々たち」である当事者たちから非難されたが、訴えられることがなかったのはFrischにとって幸いであった。

Frischはまた、90歳で亡くなった母親の死も書きとめているが、この母親はその時55歳の息子に「厳しさを持たなくもなく」次のように言っていたのである。「お前は女性のことばかり書いてはいけないよ、なぜならおまえは女性のことが分かっていないんだからね」<sup>36</sup>

しかしFrischには女性たちに嫌悪された経験はほとんどなかった。あるのは主として彼の側に落ち度のある、女性との信頼関係を損ねた経験だった。そして彼の自信が次の文に垣間見える。

「ときおり私は彼女たち、女性たちを理解していると思う。そして最初に彼女たちは私の思いつきを、彼女たちの本性への私の思いを気に入る。私よりも以前の男たちが見なかったものを私が彼女たちの中に見つけると、少なくとも彼女たちは不思議がるのである。そのことによって私は彼女たちをだいたい手に入れるのである。一度として私はあなたのように男性と話したことはなかったわ、この言葉を私は一度ならず聞いた」<sup>37</sup>

そしてそれに上乗せして「私が愛した3人の女性で4度の墮胎。3回はそれが正しいと疑いもしなかった。驚かないことは一度もなかった。そんな時の男の役割は、医者にお金を払うことである」<sup>38</sup>と記述しているのである。恐らくその相手にはTetta ScharffとHelga Roloffが含まれていると思われるが、Frischは明確に示してはいない。さらに彼は「私の悪癖は男性優越思想だ」と記し、それに引き続いて開き直ったように「私の過ちをここで見つけるだろう」とも記しているのである。<sup>39</sup>しかしこのような記述が見られても、Frischが女性蔑視論者とは到底思えず、Bachmannとのかかわりなどからは、むしろ女性崇拜的な面も見られるのである。またMarianneの行動に彼が自分の行動を重ね合わせて振り返り、自分が不貞を働いた時の当時の妻Trudyの心情に思いを馳せる気持ちがあれば、Frischのその後の人生も変わっていたであろうが、FrischはFrischのままであった。Frischはこの作品の中でも „MY GREATEST FEAR: REPETITION“ と記している。繰り返しを嫌悪するのが彼の信条ゆえか、同じ女性のもとに立ち返ることはなく、より若い女性にとその性癖は変わらなかった。つまり、繰り返しを嫌悪するはずが、繰り返し他の女性に魅かれ続けたのである。その点に矛盾はなかったのか、繰り返しへの彼の嫌悪はすべての面にあてはまる確固とした根本理念ではなかったのだろうか。

奔放に生き、そのような体験を続けた作家が時を経て自分自身を描く時、同時にそこに関わった人たちを描くことはどこまでが許されるのか、事前の了解なしに、何が許され、何が否定されるのか、作家は何を書いても良いのか、これらについて特に基準などあるはずもない。作家が何をどのように描くかは作家の自由であり基本的な権利である。その際何のものにも縛られないのは当然であるし、その描く対象や描き方にその作家の人間性や力量が現れるものであろう。しかし、描く対象が身近な人間で、しかも実在しているならば、そこには書いて良い、書くことが許される境界が存在するであろう。その境界線をどこに引くかはその作家の見識、文学的センス、人間性に比例する。境界がなければ単なる暴露本の類に陥る可能性が高い。文学作品と暴露本には必ずや品質の差があるはずである。したがって作家には、それぞれの状況に配慮した、少なくとも描かれた人を窮地に追い込まない心遣いが求められるであろう。しかしこの作品においてFrischはそれらの点を十分に配慮したとは考えにくい。配慮したとしてもその境界線は自分の都合の良いようにしか引かなかったと思われる。それゆえに本当のことならば何を書いても許されるのか、という疑問が生じるのである。Frisch自身はその点について触れていない。描かれた人物の中にはBachmannのようにすでに他界した人もいるが、彼女個人だけですまないこともあるし、彼女以外のほとんどはこの本が出版された当時はまだ存命中の人たちであり、その時にはFrischとは関わりのないそれぞれの生活を営んでいたのである。あまりに個人的なことや、あるいは人間の尊厳にかかわることも含まれ、Frischの配慮のなさに大きな驚きと、深い落胆を禁じ得なかった人もいたのである。闇討ちのようにその人たちの生活を脅かすことは許されざるべきであろう。したがってこれは好奇心旺盛な読者には強い関心を持って読まれることになったが、同時にその配慮のなさに対する強い反感、反論も呼び起こすことになったのである。作品の内容の是非と並んで、Frischが本人たちの了解を得ずに作品に登場させたことは咎められるべき点もあろう。上述のUrs Bircherによ

れば、「Trudy Frisch-von Meyenburgは『公衆の面前で裸にされた』と感じたし、Käte Schnyder-Rubensohnは、自分がこのような形で扱われるのを見るのは『気高さに欠ける』と思った」と記している。<sup>40</sup>さらに、Montaukに同行したAliceがVolker Weidermannに語ったところによると、Frischは二人で過ごしたMontaukでの週末を作品に描くとは一言も彼女に言っていなかった。ある時郵便が届き、「ささやかな本です。気に入ってくれることを希望します」と書いてあった。彼女は何日間もかかって、辞書を片手に何とかそれを読み終えたのである。そして「私は真っ先に憤慨しました、そして恥ずかしさでいっぱいになりました」と語っている。彼女はFrischがすべてをあからさまに書いたことが信じられなかったのである。とりわけ、彼女の真の同一を覆うという配慮を彼がまったくしていない点に驚いているのである。Helen Wolffの出版社の30歳で、赤毛の女性アシスタント — それが誰かを知らうと思う者はこのLynnのモデルが誰であるかをすぐにわかったし、彼女の上司は意地悪そうに「おう、Aliceが出版社以外にも一つの生活を持っているとは全く知らなかったよ」と言った、とAliceは語っている。<sup>41</sup>これはいかにその影響が大きかったかの一端である。

そしてこの作品を読んで不快に思ったのは生々しく描かれた女性たちだけではなかった。長女のUrsulaも不快感を抱いた一人だったのである。つまりUrsulaが納得できなかったのは、Frischの次の文である。

「若かった頃、私はもともと子供を望んではいなかった。子供が生まれたという知らせに、妻のためを思って私は喜んだ」<sup>42</sup>

この文章は長女Ursulaの誕生を指している。彼女は2009年に父親Maxとの関わりを中心に描いた „Sturz durch alle Spiegel“ という本を刊行しているが、その中で „Montauk“ で記された父親の文章でいかに傷ついたかを述べている。

「この文章を再読して今、もうその時からすべてが始まっていたのかという疑問が私にはわき起こります。…私の父はこの文章の言語道断さをよくわかっていたかどうか、私はわからなかったし、その文章をどのように思っていたのかをMaxに一度も尋ねなかったと私は告白しなければなりません — それとは別にその影響は、とんでもなくひどかったのはわかっています。」<sup>43</sup>

自分は望まれて生まれてきたのではなかったのか、という強い思いがしてUrsulaは悲しんだだけではなく立腹した。

このように身近の人たちを題材として作品を描いた場合、様々な影響、とりわけ誰かを傷つけたり、不快にしたりすることは大いにありうることである。描かれた人たちの中では、その不満や怒りや抗議の気持ちを表現する場や方法を持っていない人たちも多い。作家がそれらのことをどのように解消していくかは容易なことではないが責務であろう。

作家はその生み出す作品が文学的に優れていれば、それだけで十分なのか、それとも、作家の個人的生活においても尊敬すべき言動が求められるのか、作家の真の価値と人間としての真の価値は一致するものなのか、そこには永遠に解決しないものが存在しているのかもしれない。また、読者の期待は作品に限定されるのか、それともその作者の行動や人間性にまで広げられるのか、この点も意見が分かれるところかもしれない。

## 5. 結び

Aliceはほどなく会社を辞め、Frischとの関わりは切れたかに思えたが、その細い糸はまだつながっていた。その約5年後、滞米中のFrischの誕生日にAliceから花束が届くのである。二人のかかわりの再開であった。しかしそれは約3年間で、その後Frischは子供のころから識っていたMadeleine Seigner-Bessonの実の娘であるKarin Pilliodと最後のパートナーになるのである。だが、Frischがどのような人たちと関わりをもったとしても、法に抵触したわけでもなく、倫理的問題はあろうとも、それはFrischの人生であり、とやかく言われる筋合いのことではない。しかし彼が „Montauk“ という作品で自分の人間関係を公開し、個人的なことをかなりの程度に露呈している以上、その作品の解釈のために彼の人間関係がより深く掘り下げられ、個人的な生活に立ち入られるのはやむを得ないことである。そして彼があからさまにしたと思われていた関わりの中では、Frischが21歳の時夢中になったElse Schebestaのことは伏され、6年間にわたって不倫を重ねたMadeleine Seigner-Bessonはほとんど気づかれられないような形で触れられているにすぎない。もしかすると „Montauk“ に登場しない、さらに伏せられた人達も存在するのも知れない。彼が設定した20年という縛りの期間も過ぎ、これからは未公開だった資料が徐々に明らかにされてくるであろう。そしてそれらの新資料が彼のさらなる関わりを明らかにしてくれるかもしれない。Max Frischの全容解明のためにはもう少しの時間が必要であろう。

---

### [参考文献]

- Max Frisch: Gesammelte Werke in zeitlicher Folge. Sechs Bände, hrsg. von Hans Meyer, Erste Auflage 1976, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1976.
- Max Frisch / Uwe Johnson Der Briefwechsel 1964-1983: hrsg. von Eberhard Fahlke, Suhrkamp Taschenbuch 3255, Erste Auflage 2001. Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main.
- Ursula Priess: Sturz durch alle Spiegel. 1. Auflage, Genehmigte Taschenbuchausgabe Januar 2011, btb Verlag in der Verlagsgruppe Random House GmbH, München. der Originalausgabe 2009 by Ammann Verlag & Co., Zürich.
- Andreas B. Kircher: Max Frisch. Suhrkamp BasisBiographie 50. Erste Auflage, Suhrkamp Verlag, Berlin, 2011.
- Ingeborg Gleichauf: Jetzt nicht die Welt verlieren Max Frisch eine Biografie. Carl Hanser Verlag, München, 2010.
- Julian Schütt: Max Frisch. Biographie eines Aufstiegs 1911-1954. Erste Auflage 2011. Suhrkamp Verlag Berlin 2011.
- Jürgen H. Petersen: Max Frisch. 1. Aufl. Sammlung Metzler, Band 173. Stuttgart, 1978.
- Lioba Waleczek: Max Frisch. Deutscher Taschenbuch Verlag GmbH & Co. KG, München, 2001

- Urs Bircher: Max Frisch 1956-1991 Mit Ausnahme der Freundschaft. Limmat Verlag, Zürich, 2000.
- Volker Hage: Max Frisch Sein Leben in Bildern und Texten. Erste Auflage, Suhrkamp Verlag, Berlin 2011.
- Volker Weidemann: Max Frisch. Sein Leben, seine Bücher. 2010, Verlag Kiepenheuer & Witsch, Köln.
- Walter Obschlager: Max Frisch, Briefwechsel mit der Mutter 1933. hrsg. von Walter Obschlager, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 2000.

〔注〕

- 1 第1回(1998年): Tankred Dorst (1925年12月19日Thüringen生) 73歳で受賞現在89歳。
- 第2回(2002年): Jörg Steiner (1930年10月26日Biel/Bienne生; 2013年1月20日83歳で没) 72歳で受賞。第3回(2006年): Ralf Rothmann (1953年5月10日Schleswig生) 53歳で受賞, 現在61歳。第4回(2010年): Barbara Honigmann (1949年2月12日Berlin生) 61歳で受賞, 現在65歳。第5回(2014年): Robert Menasse (1954年6月21日Wien生) 60歳で受賞。現在60歳。
- 2 Montauk: Gesammelte Werke in zeitlicher Folge. S.748
- 3 Montauk: S.748.
- 4 Montauk: S.664.
- 5 Montauk: S.655.
- 6 Montauk: S.628.
- 7 Montauk: S.687.
- 8 Montauk: S.742.
- 9 Montauk: S.624.
- 10 Montauk: S.696.
- 11 Werner Coninx: チューリヒを中心とした地域の日刊新聞Tages-Anzeigerを発行するTages-Anzeiger AGの創立者Otto Coninx-Girardet [1871-1956] の息子
- 12 Montauk: S.684.
- 13 Montauk: S.709.
- 14 Montauk: S.710.
- 15 ebd.
- 16 Montauk: S.619. in: GW VI.
- 17 Montauk: S.719f.
- 18 Jürgen H. Petersen: S.165f.
- 19 Montauk: S.720.
- 20 Montauk: S.633.
- 21 Montauk: S.681.



- 22 Montauk: S.751.
- 23 Donald Barthelme : 1931年 4 月 7 日生, 1989年 7 月23日没, 享年58歳。
- 24 Montauk: S.695.
- 25 Montauk: S.680f.
- 26 Montauk: S.686
- 27 Weidermann: S.328f.
- 28 Weidermann: S.329.
- 29 Montauk: S.726.
- 30 上述のようにJörg Steinerは第 2 回Max Frisch賞の受賞者である。
- 31 Montauk: S.741.
- 32 ebd.
- 33 Frankfurter Allgemeine Zeitung, 7.Oktober 1975.
- 34 „Tagebuch1966-1971“ S.289. in : GW VI,
- 35 Montauk: S.633. „unter Kunstzwang“
- 36 Montauk: S.688.
- 37 Montauk: S.695.
- 38 Montauk: S.688.
- 39 Montauk: S.679.
- 40 Urs Bircher: S.201. ※Urs Bircherは若いころバーゼルで, Käte Schnyder-Rubensohnの息子たちと親交があり, その家に入入りしていた。そこで彼はFrischが1930年代に Käteに宛てた手紙を参照したりすることができた。
- 41 Weidermann: S.321.
- 42 Montauk: S.689.
- 43 Ursula: S.88f.

### (Abstract)

In seinem Prosawerk „Montauk“ hat Max Frisch von vielen Frauen erzählt, mit denen er in engen Verhältnissen gestanden war. Am Anfang des Werkes schrieb er, daß das Buch ein aufrichtiges Buch sei. Aber es wäre nicht sicher, ob das wirklich richtig ist. Was für Frauen er geschrieben hat, soll hier deutlicher werden.

